

氏名	山本 秀夫
学位	博士
専門分野の名称	学術
学位授与番号	博乙第 4422 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則(文部省令)第 4 条第 2 項該当)
学位論文題目	近世瀬戸内「浦」社会の研究
学位論文審査委員	主査・教授 倉地 克直 教授 久野 修義 教授 今津 勝紀 教授 藤井 和佐

学位論文内容の要旨

(1) 研究の進め方

本研究は、近世瀬戸内における「浦」の地域社会像について明らかにする実証的研究である。その際に、以下の三点について留意して研究を進めている。

第一は、「漁撈」の捉え方である。「浦」地域社会史を解明するために、そこで行われる生業の代表である「漁撈」というものを、文献史料・民俗調査・民具調査などを通して、歴史的・多角的に考察した。

第二は、「浦」とそれを構成する人々についてである。論文では、「浦」を海と関係した漁村・港町・農村・城下町・在町・宿場町など、近世の人々が生きた複合的生活空間と捉えるとともに、「浦」を内的にも外的にも構成する人々についての、従来の位置付けをも再考察し、近世の地域社会の運営主体の一側面を明らかにした。

第三は、「浦」と人・物のつながりについてである。この点について、①「来て、帰る人・物」のためには、「浦」には港湾施設・魚市場・宿場施設などが必要であろう。②「通り過ぎる人・物」のためには、「浦」には道路や宿場施設などが必要であろう。③「人の中には、やって来て、とどまる」場合もある。そのためには、「浦」には、「どこに住む」という居住空間が、また「どうやって生きるか」という職業空間も必要である。どの場合も「浦」に来たということは共通である。加えて、「なぜ、来たのか」「どうやって来たのか」を追求することが大切である。つまり、前者は知識や情報、後者は技術の問題である。

以上のように、本研究では、人(知と技術)、物(原料と製品)、手段(櫓材・船・網・漁船など)、土地(居住地・生活の場・所有など)、負担(水主役)などの視点から、「浦」の地域社会像を解明することが目指されている。

(2) 研究史上での位置付け

研究にあたっては、多くの先学の研究に依拠し、また時にはそれらを批判的に継承しながら論を進められている。従来の研究史との関係は以下のようである。

①漁業史・漁村史・漁政史との関係。「浦」社会の分析においては、単に漁業面のみを対象とするのは不十分とする。近世地域社会史研究は、漁業や鉱業といった、一業種を固定化して深化させていくだけでなく、異業種の諸相に目配りする必要性を示唆しているこ

とをうけて、「浦」社会を「人・物・技術知」という新たな視点で実証的にみようとしている。

②海運史・海事史・流通史との関係。例えば、「弁才船は船材などによって自動的にできてきたわけではない。」と考え、船造りに携わる技術者とその船の注文主の存在にまで目配りをすべきだとする。また、「その船は、自動的に出港し、荷物を自動的に運搬したのではない。」つまり、櫓や帆、そして知識や情報が必要であり、しかも、そこには人が関わっており、これらの人々は「浦」社会に住んでいる（あるいはそこに入ってくる）のである。そのことをも重視する。

③民俗学・民具学との関係。最近、歴史学では、「史蹟論」「記憶論」が議論され、とくに近代史においてはさまざまな「経験」のリアリティに基づく歴史叙述がなされている。これらは、伝承を語り継いできた行為の中に、その土地の歴史の記憶を見つける学問である民俗学の研究方法だと言える。また、民具に地域を語る歴史資料の役割を与えて、多くの業績を残しているのが民具学である。上記の諸学の研究姿勢の融合によって、「浦」社会の諸相を照射しようとした点に本研究の特徴がある。

④近世村落社会論との関係。最近とみに近世村落社会論が活気づいており、特に村を複合的・多角的にみることが重視されている。本研究では、「浦」社会は「海村」「海辺集落」「海付集落」などと呼称されてきた地域であるが、実はその性格は、農村、漁村、山村、都市（宿場町・在郷町・城下町など）を含んだ複合的生活空間であると提起して、論を展開している。

（3）研究の構成

研究は申請者が刊行した『近世瀬戸内「浦」社会の研究』（清文堂出版、2011年）を主要内容としている。その目次は以下の通りである。

序章 本書の課題と視角

第一部 漁撈の歴史的考察

第一章 直島の鯛網漁

第二章 瀬戸内の鯛網漁

第三章 真鍋島の鯛網漁－民俗学的補遺－

第二部 浦と地域運営

第一章 讃岐高松藩の浦社会の基礎的考察

第二章 高松藩領の浦（一）－坂出浦－

第三章 高松藩領の浦（二）－小方浦－

第四章 高松藩領の浦（三）－引田浦－

第五章 丸亀藩領の浦－庄内浦－

第六章 幕府領直島－「鯛献上」と地域社会－

第七章 「御用水主」と地域社会

第三部 人・物の「移動」

第一章 櫓材流通

第二章 近世期の備前牛窓の造船業

第三章 讃岐高松城下「平福屋」について

第四章 旅としての「へんろ」

以上の加えて、新たに「終章 研究の成果と今後の課題」が追加された。

各章の特徴や成果については「審査結果の要旨」に譲るが、終章では、①「漁撈」を「総合的」に捉える、②「浦」社会の多様性、③「浦」社会の広がりの確認、といった本研究の成果を踏まえて、①古代や中世の「浦」・「津」から近世の「浦」への展開、②領主が支配の対象として捉える「浦方」と実際の生活空間としての「浦」社会との関係、③領主の課す「水主役」の性格や「水主浦」と「村」「町」との関係、④「浦」社会の運営に果

たす流通関係者の役割、など本研究での論点を整理している。

学位論文審査結果の要旨

本研究は、近世讃岐地方の海辺村を対象とした実証的研究であり、『近世瀬戸内「浦」社会の研究』（清文堂、2011年刊）として刊行されたものを主内容としている。本研究の方法・視点としては次のような特徴があげられる。

①古文書を中心とした文献研究を基礎に、民俗学・民具学の成果も取り入れながら、学際的に追求する。

②従来の漁業史・海運史の枠にとらわれず、近年の地域社会論の成果に学びながら、地域の自律性を複合的にとらえる。

③流通やその担い手が地域の中で果たした役割を、知識・技術・情報の媒介者としての機能に注目して解明する。

本研究の成果を目次に順ってあげると次のようである。

第一部第一章では、直島の鯛網漁の技法・漁場・組織・運営方法について文献に基づいて解明した。近世の鯛網は主に大網であったことも指摘した。あわせて、幕末の「海岸取締役」を勤めることが鯛網漁の拡大や勤役者の特権化につながることを明らかにした。

同第二章では、鯛網漁の展開を備讃海域に広げて技術・人の交流の中で検討し、この地域での鯛網漁の全体的な動向を明らかにした。

同第三章では、真鍋島での鯛網漁についての聞き書きを行い、明治時代以降の地漕漁の実態を記録した。

第二部第一章では、引田浦を取り上げ、「町頭一浦年寄」の存在や「御用留」の内容から浦行政の独自性を明らかにし、従来の通説的理解では捉えきれない浦の複合性を描き出した。

同第二章は、坂出村の湊町としての側面に注目し、広域流通を担う内海船との関わりが深い魚問屋が浦年寄を勤めたことが浦の発展にとって重要であったことを指摘した。

同第三章では小方浦を取り上げ、安永期に領主による浦に対する支配が強化されるが、それでも浦の自律性は強く、魚問屋が魚運上を担うことで浦に対する影響力を高めたことを明らかにした。

同第四章は再び引田浦を取り上げ、浦の空間構造を明らかにするとともに、浦方による土地利用が村方管理地に食い込む形で展開していて、「オカ」と「ハマ」が相互浸透している状況を指摘した。また、浦問屋・魚問屋が村や浦の運営に重要な位置を占めること、およびそれが流通に関わることで得られる知識や情報に基づくものであることを明らかにした。

同第五章では丸亀藩領の水主浦を検討し、役に対しては浦組として対応している状況を明らかにし、また、ここでも魚問屋がまとめ役として機能していることを指摘した。

同第六章は幕府領直島における鯛献上を取り上げ、それが漁場保障に対する儀礼行為として村が主体となって行われたものであることを明らかにするとともに、その儀礼に郷宿や魚問屋が深く関わっていることを指摘した。

同第七章は高松藩の水主役について総括的に検討し、本水主と賃水主の区別、他地域よりも遅い18世紀前半まで夫役納であったこと、などを指摘した。また、塩飽諸島における水主役の株化、代銀納化の実態について明らかにした。

第三部第一章では、和船の部材の一つである櫓材について取り上げ、日向国の櫓材が東

北地方にまで普及する経路、それを推進したのが生産地商人と専売仕法であったこと、また流通拡大の背景に技術・情報の収集があったことを明らかにした。

同第二章は従来ほとんど解明されていない地方における造船業について牛窓を例に検討し、軍船・商船・漁船のそれぞれが造られていたことを文献的に跡付けた。

同第三章は高松城下町商人の平福屋を取り上げ、砂糖問屋として専売に関わるとともに、万問屋や廻船問屋としての側面、商家としての町のネットワークとの関わりなど、従来知られていなかった興味深い事実を紹介した。

同第四章は自身が携わった遍路道の復元・現状調査の成果を踏まえ、近世の旅日記を紹介する形で、遍路旅の実際を明らかにした。特に、女性の旅や旅と村社会との関係について、新しい知見を与えた。

以上のように、本研究は近世讃岐地域の海辺村に関する最初の総合的な歴史研究として高く評価できるものである。そこで提示された事実はいずれも今後の研究発展の基礎となるものであるとともに、とりわけ従来の学問や研究の枠にとらわれず学際的に追求している点は、今後にも継承されるべき本研究の貢献である。海辺村の複合的性格、領主による行政と浦の自律的運営と関係、浦にとっての魚問屋の役割、社会における知識・技術・情報の流通が持つ意味、など今後の研究の足がかりとなる提言も貴重である。

他方、今後改善すべき点や課題は次のようなものがある。

1つは、ともすると史料や事実の提示に留まっていて、それらの歴史的意味の追求に欠ける部分があること。例えば、水主役の本質は何か、讃岐地域における水主役の特徴はどこにあるのか、「浦」支配の地域性、といった問題は、研究史や他地域の研究と比較しながら更に深めなければならない点だろう。

2つは、地域社会の実態を捉えるために〈制度－生活〉、〈支配－運営〉といった枠組みを提起しているが、いまだ抽象的で有効に機能していない。それらを含め概念に曖昧なものがあり、複雑な現象を解析するための論理を明晰にしていくことが求められるだろう。

3つは、浦社会を理解するために不可欠な漁撈について鯛網漁以外に分析がなかったのは「ないものねだり」とは言え、残念であった。瀬戸内の漁業体系全体や四季を通した漁撈や生活のサイクルのなかで、浦の人びとの営みを考えることが課題となるだろう。

4つは、浦の複合的性格やその自律性およびその担い手についての指摘は貴重な成果だが、浦の内部構造や運営の実態については未だ不明な点が多い。今後この点の解明が進めば本研究の提言の意義はますます高まるに違いない。

ただし、こうした課題は本研究の開拓者の性格によるものであり、本研究の発展可能性を示すものでもある。本研究は博士論文にふさわしいものであり、これを機に更なる研究の発展に期待するものである。